

## 【9】 仏教の基本思想との係わりにおける

### 「遊行」と「僧院の建設」と「サンガの形成」

[0] 以上、最初期の仏教の修行者は一処不住の遍歴を行っていたが、やがて精舎が建設されたために集団的な定住が始まって、それがサンガの形成をもたらしたという通説に反論するために、そもそも釈尊を含む仏弟子たちは、最初期から遍歴を常態としたことはなく、僧院が建設されるまでは確かに草庵や樹下・洞窟などに住していたが、それは定住を原則としたものであって、したがってジャイナ教の修行者やバラモン教の遍歴者と同様であったわけではないということや、それゆえ僧院の建設やサンガの形成は、そのような外的・偶発的な因縁によってもたらされたものではなく、内的・必然的な理由をもって意図的になされたものであるということ、主に原始仏教聖典の記述を実証的に検証する形で調べてきた。

そこで最後に仏教が本来もっていたはずの基本的な思想との係わりにおいて、この問題を考えてみることにしたい。

[1] まずその第1は「中道」と遍歴との関係である。そもそも中道とは、

その時世尊は5人の比丘たちに語られた。「比丘たちよ、これら二つの極端は出家者によって親しまれてはならない。何が二であるか。すなわち諸々の欲において欲を楽しみ耽り溺れる (*kāmesu kāmasukhallikānuyogo*) のは下劣であって卑賤であり、凡夫の行じることであって尊くなく、義にも相応しない。また自ら疲労することに溺れるのは苦しみであって、尊くなく、義にも相応しない。比丘たちよ、如来によってこれら二つの極端を捨てて、中道 (*majjhimā paṭipadā*) が覚られた。これらは眼を生じ、智を生じ、寂靜に、悟りに、等覺に、涅槃に導く (*saṃvattati*) 。

それでは比丘たちよ、何が中道であるか。それは聖なる八正道 (*ariya aṭṭhaṅgika magga*) である。すなわち、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である。比丘らよ、これが如来によってこれら二つの極端を捨てて覚られた、眼を生じ、智を生じ、寂靜に、悟りに、等覺に、涅槃に導く中道である。 *Vinaya* vol. I p.010 (転法輪經) 他

というものであって、これは釈尊の最初の説法の内容であったとされている。その伝承がそのまま信じられないとしても、「中道」が釈尊の悟りに決定的な役割を果たし、これが仏教の中心的立場になっていることは否定する者はいないであろう。

釈尊やヴァルダマーナが活動し、バラモン教の中に林住者や遍歴者が生まれた頃のインド社会には、輪廻と業を世界観の根底にもつ宗教者たちに共通するモラルがあり、それが「戒」として形成されていた。その主なものは不殺生・不偷盗・不淫（在家者には不邪淫）・不妄語（真実語）・欲望の抑制である。しかし欲望の抑制にはいろいろな立場があって、欲望を全否定する「禁欲」と、欲望を抑制する「制欲」（少欲知足）と、欲望の部分肯定（性欲の肯定）という3種に分類することができるであろう。第1の立場は必然的に苦行的な生活様式を選び取ったが、その代表的なものがヴァルダマーナや後に四住期が成立したときに第4の住期に位置づけられた遍歴者であった。また第3の立場は厳密には出家修行者といえない隠居的な生活様式を取る螺髻梵志（四住期の第3住期の林住者）がそれに相当する。そして

第2の立場をとったのが釈尊であってこれが「中道」である。

このように欲望に対する立場にはそれぞれの宗教者には独自の立場があったが、食欲を全否定しては生存できないし、欲望の部分肯定は欲望の全肯定に結びつくという危険性もあって、それぞれの立場はかなりの幅を有することになり、戒として示された「あるべき」姿、「こうありたい」という姿とは異なって、現実にはジャイナ教徒にも、遍歴修行者にも、そして仏教の修行者にもさまざまな生活様式をとる宗教者が存在することになった。

このようなさまざまな立場からすれば、「遍歴」は欲望を全否定する苦行に属する修行形態であって、だから釈尊の世界観の根底にある「中道」とはなじまないものであり、したがって釈尊が遍歴を第一義とされたということはある得ないことであった。中道の立場からすれば、遍歴は行える者、行いたい者が行えばよいという位置づけであって、頭陀行的な修行を原理主義的に行うことを主張した提婆達多を追放されたのも、同様の立場によるものであった。

[2] その第2は仏教のめざすものは解脱であって、それを獲得するためにもっとも必要なものは智慧であるということである<sup>(1)</sup>。そこで中道の説法にも、「これら（中道であるところの八正道）は眼を生じ、智を生じ、寂靜に、悟りに、等覺に、涅槃に導く（*samvattati*）」とされている。そして八正道の中においてもっとも重要なものは正見であり、これは真実であるところの四諦を「あるがまま」に見ることとされている。またこれを異なる形で体系的に示したのが戒・定・慧の三学やこれに解脱と解脱知見を加えた五分法身であって、これらはこの智慧を獲得するために絶対不可欠なものは禅定であるということが示されているわけである。そしてこの禅定には生活を安定させることが必要であるから、その前提として「戒」が立てられるわけであって、このような修行体系から考えても、遍歴や苦行は智慧の確立には役に立たないということになる。

一方のジャイナ教やバラモン教の遍歴修行者のめざすものも解脱であるということと同じであるが、しかしそれを得るための必要条件は、一切の業を滅するための欲望を全否定しての「無所有」や「苦行」であって、それが典型的な形として現されたのが遍歴であった。要するにこれらの修行者にとっては遍歴が解脱を得るための必須条件であったわけであるが、仏教の修行者の解脱を得るための必須条件は智慧を獲得するための禅定であり、一人静かに坐すべき禅定はむしろ遍歴とは相反するものであった。

- (1) 仏教は智慧を得ることを目的とする。しかしジャイナ教は苦行によって過去の業を滅し尽くすことが目的となっている。断食死、餓死を尊ぶことに象徴的に表れている。彼らは無所有であることが必須の要件であって、遍歴と裸形はそれを象徴的に示すのである。最後は解脱であるとしても、現実的には苦行や断食が具体的な目標であったとすることができる。

『思想の自由』 pp.271、300、366 参照

[3] その第3は仏教者の仏教者たる根底には仏・法・僧の三宝への帰依がなければならぬということである。仏教における出家はただ単に家や社会の束縛から脱するというだけでなく、釈尊の教えのもとに出家してサンガの一員になるということであった<sup>(1)</sup>。「善来比丘具足戒」の時代は釈尊の承諾を得なければならなかったし、「三帰依具足戒」の時代は仏弟子の誰かを指導者として、仏・法・僧の三宝に帰依することが求められた。そして

「十衆白四羯磨具足戒法」が制定されてからは、和尚を定めて10年間はその元で修行し、釈尊の定められた生活規定とサンガ運営規定を遵守することを条件に、サンガの許可を得なければならないということになった。その時には三帰依はその出家受戒とされたが、しかし仏教のすべての修行者はまずは沙弥・沙弥尼とならなければならなかったのであるから、三帰依は仏教の出家修行者としてのもっとも基本的な信条であるという位置づけは変わらなかった。五比丘はすでに出家者として修行していたのであり、三迦葉も舍利弗・目連もすでに出家していたが、釈尊の弟子になる時にはもう一度上記のような手続きを経て、仏教において出家しなおさなければならなかったのであって、そこには釈尊とその教えに帰依すると同時にサンガに帰依するということが含まれているのである。

そしてこのサンガに帰依するという基本的な姿勢が根底にあるからこそ、釈尊は釈尊の教えにおいて出家修行したいという者を直接に指導する中央集権的な組織にはされずに、そのサンガ入団の権利を個々のサンガに委ねられたのである。

そして釈尊は入滅の間に、おそらく遺言のような気持ちで、比丘らに「比丘僧伽の七不退法が守られる限りは、比丘らに繁栄が期待される」と説かれた<sup>(2)</sup>。七不退法とは、①比丘らがしばしば集まり、多数集まること、②比丘らが和合して集まり、和合してサンガの所作をなすこと、③未だ施設されないものを施設せず、すでに施設されたものは断じず、施設された学処をそのまま行じること、④サンガの父 (*saṃghapitar*)、サンガの導主 (*saṃghaparināyaka*) を恭敬すること、⑤比丘らが渴愛のために支配されないこと、⑥比丘らが阿蘭若の床座において念あること、⑦未だ来ない同梵行者を歓迎し、すでに来た同梵行者を安楽に住させることであって、「サンガ」はその成道から入滅に至るまで、仏道修行の根幹に据えられていたというべきであろう。

このように釈尊のイメージされ、構築されようとした仏教世界の中に「サンガ」は非常に大きな位置を占めているといわなければならない。おそらくその根底には仏教の修行者たるものは、理想的な集団の中で錬成されるべきものであるという考えがあったのであろう。したがってこのようなサンガの概念は、ただひとりで一処不住の放浪を行う遍歴とは基本的に相いれないというべきであるし、このようなサンガが僧院によって集団的定住が始まったから自然偶発的に形成されたなどと理解することはできない<sup>(3)</sup>。

(1) 「出家とは、もはや「家のない状態へと赴く」ことではなくなり、サンガという生活共同体の成員となって、集団的生活を送ることを意味するようになる」石井米雄『上座部仏教の政治社会学』p.016

(2) *DN.016 Mahāparinibbāna-s.* (大般涅槃經 vol. II p.072)、*Mahāparinirvāṇa-sūtra* (p.102)、長阿含 002「遊行經」(大正 01 p.011 中)、白法祖訳「仏般泥洹經」(大正 01 p.160 下)、失訳「般泥洹經」(大正 01 p.176 中)、*AN.007-003-020* (vol.IV p.017)、増一阿含 040-002 (大正 02 p.738 上)、*AN.007-003-021* (vol.IV p.021)、『根本有部律』「雜事」(大正 24 p.382 中)

(3) 中村元博士は、仏の滅後にサンガに対する崇拜が起こったとされている。そして三宝という定型句が成立したという。『原始仏教の成立』(「決定版」第14巻) p.236 またサンガというものは、仏教にとって本質的なものではなかったともいわれる。p.237 しかし博士が論拠とされる古い偈頌經典にも三宝をあげるものは数多く存する。例えば、*Suttanipāta* v.222~238 は「宝經」であって、これは三宝を讃えたものである。また *Dhmp.* v.194、*Udānavarga* 第30章 v.22~26 は「諸々の仏の現れたまうのは楽しい。

ただしい教えを説くのは楽しい。サンガが和合しているのは楽しい。和合している人々がいそむのは楽しい」という句や、SN.001-005-009 (vol. I p.034) の「ブツダと真理の教えとに対して信仰心あり (buddhe pasannā dhamme ca)、サンガに対して熱烈な尊敬心をもっているならば (saṅghe tibbagāravā)、彼らは天界に生まれて、そこで輝く」という句などは三宝が認識されたものと考えることができる。また SN.007-001-001、2、3、4、5、6、7、8、9、10 (vol. I p.161) には、「私は尊師ゴータマに帰依します。また法とサンガに帰依します (esāhaṃ bhagavantam gotamaṃ saraṇam gacchāmi. dhammañca bhikkhu-saṅghañca)。私はゴータマの元で出家して具足戒を受けたいのです (labheyyāham bhoto gotamassa santike pabbajjam labheyyam upasampadam)」という句が繰り返されている。これはまさしく三宝帰依である。

[4] その第4は、「律蔵」という独立した文献が存在することである。釈尊の教えが経蔵とともに律蔵というものに編集されたのは、釈尊の教えの大きな2つの柱の1つは、仏教の修行者たる者はサンガの中に暮すべきであるということがあったからである。律蔵の規定は確かに随犯随制されたものであって、それが形を整えられたのは釈尊の生涯の後半期ないしは滅後のことであったかもしれない。また聖典の編集形態には三蔵とは異なる形があったことも伝えられているが、常に経蔵と律蔵は含まれている<sup>(1)</sup>。要するにサンガに係わる教えは、釈尊の悟りの内容と世界観の根源的なところで結びついているということであって、だからサンガは偶発的に形成されたのではなく、すこぶる自覚的なものでなければならないはずである。

また出家修行者の生活規定としての経分別の部分については、以下のように考えるべきであろう。律蔵の生活規則は、最低限「こうであってはならない」「このようにしてはならない」という限界を示すのみであるから、この限度を踏み外さない限り、仏教の出家修行者の行動にはかなりの自由が許されていた。法律としての律蔵の指し示す生活はサンガの中での集団の定住生活であって、したがって大部分の出家修行者はこのような生活をしていたのであろうが、もちろん一処不住の遍歴を行ってはならないという規則はなかったから、したがって中にはこれを行う修行者もいたであろう。

一方この論文で扱ったジャイナ教やバラモン教の法典類、あるいは仏教の偈頌經典において遍歴が行われるべきだとされるのは、「こうでありたい」「これが望ましい」という行為行動の規範＝戒として示されたものであって、もちろん真摯にこれを実践する修行者もいたであろうが、現実にとりだけ実施されていたかはわからない。少なくとも原始仏教聖典の範囲ではこれを積極的に支持する材料は見いだせないことはすでに指摘した。

(1) 塚本啓祥『初期仏教教団史の研究』(昭和41.3 山喜房仏書林) p.182以下参照

[5] そして第5に、釈尊の世界観・価値観・人生観は、菩提樹下の成道の時点から入滅に至るまで果たして変わったのか、変わらなかったのかということも問題となるであろう。釈尊は菩提樹下の成道において、他の宗教者とは異なる世界観・価値観・人生観を確立され、それが他の宗教者とは異なる世界観・価値観・人生観であったからこそ、釈尊は布教を開始され、ここに「仏の教え」たる仏教が出発したのであって、この世界観・価値観・人生観が徐々に変化しながら、形成されたということはあるまいであろう。したがって諸事万端が

整わない間は、釈尊も他の宗教家と同じ世界観・価値観・人生観を共有していて、だから共通の生活様式をもっていたと考えることは、あまりにも釈尊の悟りを矮小化するものといわざるを得ないであろう。現実的なサンガやサンガの運営規則が、成道から時間を経過した時点で整備されたとしても、この基本的精神はこの成道時に確立された世界観・価値観・人生観に基づいていると理解しなければならない。そしてこの成道時に形成された世界観・価値観・人生観の中に、縁起に基づく「中道」や、悟りの智慧を獲得するためには禅定が必須であるということや、修行者はサンガの中で切磋琢磨することこそが解脱へのもっとも効率的な修道方法であるといったことが含まれていたといわなければならない。

本論文の直接的な主題に関連していえば、「遍歴」はその世界観・価値観・人生観に反しているから、それが第一義の修行・生活形態としては採用されなかったのであり、「僧院の建設」や「サンガ」はその世界観・価値観・人生観に合致しているからこそ許され、形成されたということになる。要するに最初期の仏教の修行者は他の沙門と同様に「遍歴」をすることが常態であったということはないし、「僧院」が建設されたために集団的に定住することが始まって、その結果「サンガ」が形成されたのではない、ということになる。